

横浜トリエンナーレ 2008

YOKOHAMA 2008: International Triennale of Contemporary Art

報告書

横浜トリエンナーレ組織委員会

ごあいさつ

現代アートの国際展「横浜トリエンナーレ 2008」は、79 日間で延べ 30 万人を超える方々にご来場いただき、盛況の中で無事終了いたしました。

3回目を迎えた今回は、新港ふ頭エリアに新設された会場を中心に、日本庭園の名勝「三溪園」や、多くの若者で連日賑わうショッピングモール「ランドマークプラザ」など、横浜市内7つの多様な表情をみせる会場が舞台となりました。全体テーマ「タイムクレヴァス」の下に参加したアーティストは、世界 25 カ国・地域から 72 名に及び、多彩な展示を行なったほか、パフォーマンスやプロジェクト、ライブ作品、その他関連イベントなどが会期を通して繰り広げられました。

幸いにも、横浜トリエンナーレのためのボランティア登録者数は、過去最多となる 1,500 名を数え、準備段階から閉幕までの長きにわたってご活躍いただきました。また、地元の学校との連携による教育プログラムの充実、あるいは同時期における多様な「サテライト」的イベントの自然発生的な動きなど、地域への浸透がより一層深まりをみせました。海外では、上海、光州、シドニー、シンガポールの各ビエンナーレと共同して広報活動を展開し、国際的な注目を集めました。

2001 年にスタートした横浜トリエンナーレは、これで3回の展覧会を終えました。回数を重ねるごとに、より多くの方々に支えられ、定着に向けた力強い歩みを示してきたことは、主催者として慶びに絶えません。この報告書は、本展覧会を企画構成した水沢 勉 総合ディレクターのテキストのほか、来場者やボランティア参加者へのアンケート調査結果、展覧会にまつわる様々な記録を収録しております。第3回展を振り返った率直な意見や感想を、各種データとともに記録にとどめることによって、横浜トリエンナーレ 2008 の事業報告とさせていただきます。

最後になりましたが、本展の開催にあたり、ご支援ご協力を賜りました全ての関係機関、法人、関係者の皆様方に対して深く感謝いたしますとともに、今後とも横浜トリエンナーレへのご高配を何卒お願い申し上げます。

平成 21 年 3 月

国際交流基金
横浜市
NHK
朝日新聞社
横浜トリエンナーレ組織委員会

目次

■ 主催者あいさつ	2
■ 事務局長報告	4
■ 総合ディレクター報告	5
■ 実施概要	9
■ 会場風景写真	12
■ 参加作家一覧	14
■ 開催記録	
・入場者	18
・収支決算	19
・会期中のイベント・関連プログラム	21
・教育プログラム	25
・ボランティア	26
・広報	28
・ガイドブック・カタログ	34
・地域との連携	35
■ アンケート集計	37

横浜トリエンナーレ 2008 を終えて

「横浜トリエンナーレ 2008」が閉幕してから早くも4カ月になろうとしています。イメージカラーとして、横浜の街に良く映えたグリーンのパナーも、サインボードも姿を消し、何事もなかったかのように原状に復されました。果たして、今回のトリエンナーレは、30万人を越えた来場者の方々の記憶に刻み込まれているでしょうか。

第3回展となった今回は、港・横浜の風景と歴史が、展覧会の構成上欠かせないパーツとなって組み込まれた点が大きな特徴でした。横浜港の埠頭に新設された展示場、歴史的倉庫、客船ターミナル、ショッピングモール、近代に整備された日本庭園などを会場に、特定の時空間に成立した作品が並びました。トリエンナーレはこれまでも、その場に固有の作品を盛り込もうと努めてまいりましたが、3回目の実施を通して、特に横浜という街との間に、借り物ではない関係を結び始めたのではないかと思います。

もう一つの新機軸は、身体性をもたらすパフォーマンス的要素の重視です。「タイムクレヴァス」をテーマとする展覧会の内容を難解とする声もありましたが、一人ひとりの来場者に思索を促そうとする試みは、密度の濃い時間と空間をもたらしました。会期中は、参加アーティストによるパフォーマンスが数多く実施され、国内ばかりでなく海外からも大きな注目を集めたほか、市内各所に場を移してのプロジェクトや連日のライブ作品の公開も行われました。また、同時期に様々な場所で、多彩な展覧会やイベントが開かれ、芸術の秋に彩を添えました。

2001年に「新たな文化創造」を期してスタートした横浜トリエンナーレは、これで3度の展覧会を終えました。草創期特有の高揚感に満ちた第1回展、また「アート・サーカス」のタイトルに相応しいスペクタクルを実現した第2回展と比べると、第3回展は、いずれとも大きく趣を異にするものとなりました。各回の振幅の大きさゆえに、横浜トリエンナーレは3回開催してもなお、いまだに1つの定まった事業イメージを確立していません。しかし、現代アートが社会状況や世の中の新しい動きに敏感に反応するものである以上、3年周期で実施される国際展が、毎回異なる様相を呈することは避けられないことであり、いささか無責任な言い方をすれば、むしろ私たちはその変化のあり様を、楽しむべきであるのかもしれない。

トリエンナーレは回数を重ねるごとに、ボランティア登録者数が増え、さらに今回はサポーター・グループの自主的な応援活動も展開されるなど、ますます関心も高まっています。人々が横浜に集い、新しい空間がもたらされ、新しい語らいの輪が広がる — 横浜トリエンナーレの醍醐味は、まさにこの点にあるのだと思います。100年を越える歴史を刻む「ヴェニス・ビエンナーレ」と比べれば、横浜トリエンナーレはまだ始まったばかりです。多数の皆様のご参加とご協力のもと、この国際展がじっくりと時間をかけて独自色で染まり、横浜流の国際展として定着していくことを願っています。

横浜トリエンナーレ事務局
事務局長 伊東正伸

「タイムクレヴァス」を終えて

2008年9月13日にオープンした「横浜トリエンナーレ 2008 タイムクレヴァス」はぶじ同年11月30日に79日間の会期を終了した。全世界で数多くの国際展が乱立している現在、この展覧会によって、なにが問われ、なにが答えられ、なにが未回答のままに留まったのか。細部ではなく全体としてここで振り返っておきたい。

今回3回目を迎えた横浜トリエンナーレは、過去2回の実績を踏まえ、また、それに支えられて実現することができた。一般的に広く認知されているとはいいがたい、現代美術の世界的動向を、なるべく幅広い見地から検証して、テーマに沿って選別し、展示することにともなういくつかの障害は、過去の2回の実績と経験という背景なしには乗り越えることは不可能であったと思われる。いうならば過去の浮力に助けられたともいえよう。第1回展、第2回展を経験した事務局スタッフはもちろんのこと、今回も含めて、すべてにボランティアとして参加してくれたひと多数含んだ市民の方々もそうしたエネルギーの源であった。

もちろん、過去2回の内容と形式をそのまま継承するのではなく、意識的に差異化を追求しなければ、そもそも現代美術のめまぐるしい変化に対応しながら、清新な切り口を展覧会として提示することはできない。そのために、わたしが、まず意識したことは、展覧会の内容にかかわる主題を掲げることであった。しかも、むしろ、あえて謎めいた広がりの中にわたしたちを投げ込んでしまうような、観る人ひとりひとりが答えを探して自問自答するような、内省的なテーマを掲げてみたいと考えた。

そのために言葉を探して数日を過ごす、ふしぎなことにその言葉は向こうからある日訪ねてきたように思う。時間と空間をねじり合わせた、アマルガムのような言葉。「時間」と「裂け目」。「タイム」と「クレヴァス」。そのようなあえて矛盾するような言葉として「タイムクレヴァス」を造語して、展覧会の内容を考えはじめ、概要をまとめて、第3回展の総合ディレクター選考のためのプロポーザル資料を用意した。あまりにも楽観的な言葉をキャッチコピーとして濫用することにたいして、9.11以後の世界の基本的な状況は、ますます緊張のなかであり、人間性は歪められている、アートは、それを直視するための最良の手段であり、その直視することそのものが、わたしたちを勇気づけるのだ、という主張を込めた。

その間に、この「タイムクレヴァス」に相当するドイツ語「Zeitenschrunde」をユダヤ系の詩人パウル・ツェランが、詩集『息の折り返し(Atemwende)』(1967年)のなかで用いていることを知り、大いに勇気づけられた。

プロポーザルの結果、わたしの提案が選ばれ、その後、すぐにキュレーター・チームの編成に取り掛かった。ダニエル・バーンバウム、ハンス＝ウルリッヒ・オブリスト、ベアトリクス・ルフ、三宅暁子、フー・ファンによって国際的なチームが、なによりもまずその現代美術への情報量、洞察力、交渉力などの高い評価に加え、地域、ジェンダー、年齢のバランスなども勘案して選ばれることになった。

キュレーター・チームは、ロンドン、フランクフルト、マイアミ、チューリヒ、東京、マドリッドなどで会合を重ね、内容を練り、それにふさわしいアーティストのリストアップしていった。ノミネートされたア



アーティストの名前は一時 200 人を超えた。その時点で、テーマをより明確に性格づけることが議論され、「パフォーマンス」という要素がその制作にとって重要な意味を持つアーティストに絞り込み、作品だけではなく、会期中に可能な限り、パフォーマンスを行い、展覧会全体の時間的側面をより際立たせるというコンセンサスが形成された。その結果、アーティストの人数は、すぐに 80 人前後に絞り込むことができた。

その間、同時並行的に、会場をどのようなにするのかという議論と調整が、日本では進められた。第 2 回展の会場を当初使用する予定であったが、いくつかの事情により使用不可能となり、新たな候補地を検討することになった。結局、新港ふ頭に新しく展示空間を建設することになった(新港ピア)。しかし、これもさまざま港湾地区の条件があり、当初の 1 万㎡以上の展示面積を確保できないことがあきらかになり、赤レンガ第一倉庫の一部、日本郵船海岸通倉庫(BankART Studio NYK)を大幅な改修工事を施して大部分利用する方針が定まった。新港ピアの建築については、西沢立衛氏のアドバイスを受けつつ、全体デザインを検討した。また、西沢氏には、新港ピアの展示空間のデザインをお願いし、赤レンガ倉庫と日本郵船海岸通倉庫の展示空間のデザインについては日埜直彦氏に依頼した。

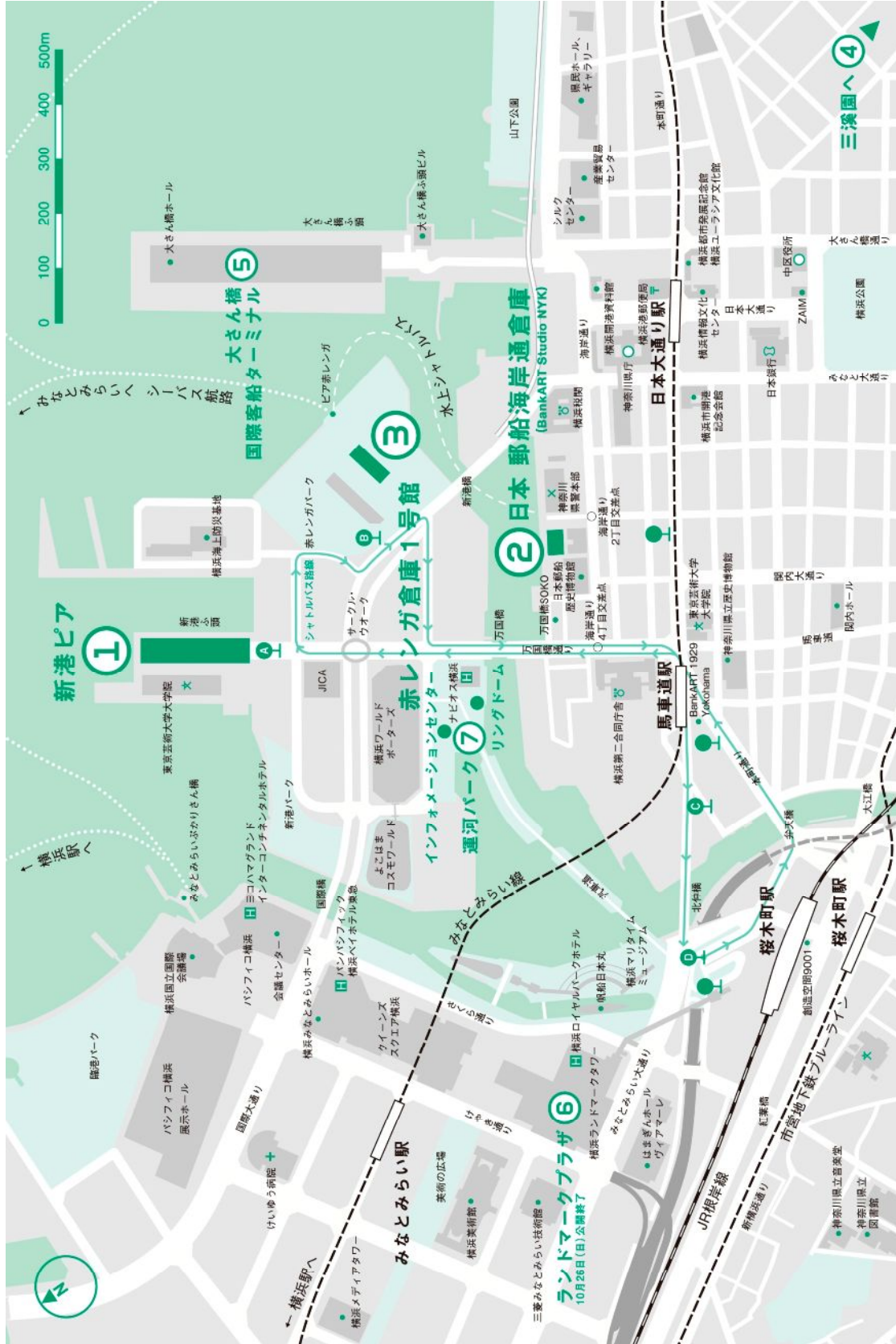
それでも全体として展示空間は、前 2 回に比べると十分ではなく、ランドマークタワーの吹き抜け空間、大さん橋国際客船ターミナルの中央区画、市内各所を移動するプロジェクトなどを付加し、さらに、思い切って、三溪園も会場のひとつに付け加えた。重要文化財の指定を受けた貴重な歴史的建造物を展示空間として利用することは、さまざまな困難を伴ったが、今回のテーマ「タイムクレヴァス」にもっともふさわしい空間であり、三溪園側の全面的協力によって実現することができた。また、参加アーティストたちも意気込みをもって作品制作に臨んでもらえ、忘れがたい空間が現出することになった。

とはいえ、過去 2 回も含め、横浜トリエンナーレの会場が定点化しないことは、経済的にも、効率化という点でも、また(これがおそらく最重要であろうと思われるが)広報の点でも、重大な問題を残したように思われる。どこで開催されているか、主会場が定まっていなかったために周知されないのである。会場問題は、今後に残された最大の課題であろう。

予想されたこととはいえ、作家選定後、なるべく新作を依頼しようとしたために展示作品の具体化に時間を大幅に要してしまった。当然、アーティストはぎりぎりまで可能性を追求し、しかも、作品ばかりでなく、国外作家の場合には、来日時にパフォーマンスを原則要求されているために、通常の展覧会よりもはるかにコンテンツの確定が困難であった。もちろん、それは、キュレーターたちが望んだ「予想不可能性」というパフォーマンスの本質を、展覧会の本体に組み込んだ結果でもあった。ただでさえ、気が遠くなるほどの労働量である展示に並行しつつ、パフォーマンスを準備するのは、展覧会の難易度としてはそうとう高いレベルのものであったと思う。展示も、仕込みも、パフォーマンスそのものも、過密スケジュールのなかで進行した。そのためにコンテンツを普及プログラムに周知させる十分な時間がないままにオープンに至ってしまったことは否めない。ボランティア、来場者に、作家・作品についての情報を事前に十分に提供できなかった。それは、広報に関しても今回の問題点となってしまった。

作品、パフォーマンスについては、いくつかのハイライトともいうべきすぐれた成果をあげられたのではないかと思う。町中に繰り出した大巻伸嗣の移動式の大型作品、神出鬼没というべき田中泯の「場踊り」。それときわめて対照的な三溪園でのティノ・セーガルの継続的なパフォーマンス。展示からパフォーマンスまで、驚くべき自在な即興性で、観衆を魅了した伝説のアーティスト、ジョン・ジョナス。ケリス・ウィン・エヴァンスとスロビン・グリッスルのコラボレーションによる大型インスタレーションの音の「乱反射」。血を流しながら3トンものガラスの破片のなかで5時間ひたすら踊りつづける勅使川原三郎と佐東利穂子。赤レンガ倉庫での歴史的映像の展示。70メートルの通路を利用したミランダ・ジュライの観客参加型のキュートなインスタレーション。会場相互の連絡が悪いとはいえ、悪いからこそ、巡礼のように苦勞して訪れたときの、三溪園の作品群の思いがけないたまたまい。中谷芙二子の霧が流れて、他の作品や周囲の空間を包み、それが霽れると、まったく違う相貌でそれらがふたたび現れる。横浜を舞台に「タイムクレヴァス」が出現した瞬間がそこにはいくつも象嵌されていた。

横浜トリエンナーレ 2008
総合ディレクター 水沢勉



横浜トリエンナーレ 2008 会場地図



実施概要

1. 会期

2008年9月13日～11月30日(会期中無休、計79日間)

2. 会場

新港ピア、日本郵船海岸通倉庫(BankART Studio NYK)、横浜赤レンガ倉庫1号館、
三溪園、大さん橋国際客船ターミナル、ランドマークプラザ(2008年8月1日～10月26日)、
運河パーク

○会場間の交通

・シャトルバス……30分間隔で運行

(ルート: A 新港ピア→B 赤レンガ倉庫→C 馬車道駅前→D 桜木町駅前)

・水上バス……土・日・祝日のみ、30分間隔で運行(定員12名)

(ルート: ピア赤レンガ⇄日本郵船海岸通倉庫)

3. 参加作家

世界25カ国・地域から72名の作家が参加(「作家リスト p.13-14」)。全体テーマ「タイムク
レヴァス」のもと、作品の展示やパフォーマンスを行った。

4. 総合ディレクター

水沢 勉(神奈川県立近代美術館企画課長)

5. キュレーター

ダニエル・バーンバウム(シュテーデル造形美術大学学長、ポルティクス ディレクター)

フー・ファン(ビタミン・クリエイティブ・スペース アーティスティック・ディレクター)

三宅暁子(現代美術センターCCA 北九州 プログラム・ディレクター)

ハンス・ウルリッヒ・オブリスト(サーペンタイン・ギャラリー 展覧会プログラム

共同ディレクター、国際プロジェクト担当ディレクター)

ベアトリクス・ルフ(クストハレ・チューリッヒ ディレクター)

6. 会場空間構成

西沢立衛建築設計事務所(新港ピア)

日笠建築設計事務所(日本郵船海岸通倉庫、赤レンガ倉庫1号館)

7. コミュニケーション・デザイン

ブルーマーク

8. 主催

国際交流基金、横浜市、NHK、朝日新聞社、横浜トリエンナーレ組織委員会

9. 後援

外務省、文化庁、神奈川県、神奈川新聞社

10. 助成

オーストリア大使館(オーストリア文化フォーラム)、Bundesministerium für Unterricht, Kunst und Kultur、財団法人野村国際文化財団、ifa Institut für Auslandsbeziehungen e.V.、Mondriaan Stichting、CULTURESFRANCE、Pro Helvetia、The Danish Arts Council、グレイトブリテン・ササカワ財団、The British Council

11. 特別協賛

大和ハウス工業(株)

12. 協賛

ブルームバーグ、森ビル(株)、(株)資生堂、大日本印刷(株)、(株)イトーキ、キリンホールディングス(株)、相模鉄道(株)、日本郵船(株)、(株)モリモト、(株)アイネット、コスモ石油(株)、東急グループ、東京ビジネスサービス(株)、パシフィックホールディングス(株)、(株)ワコール、(株)シグマ映像、(株)サカタのタネ、タカナシ乳業(株)、馬淵建設(株)、(株)横浜銀行、横浜信用金庫、(株)ファンケル、JFE スチール(株)、(株)イリス、上野トランステック(株)

13. 協力

(株)INAX、日本航空、パナソニック(株)、(株)ビームス、(株)ポートサービス、(株)インターオフィス

横浜トリエンナーレ組織委員会

<会長>

小倉 和夫(国際交流基金理事長)
中田 宏(横浜市長)
福地 茂雄(NHK 会長)
秋山耿太郎(朝日新聞社社長)

<委員>

高階 秀爾(財団法人西洋美術振興財団理事長)
建畠 哲(国立国際美術館館長)
雪山 行二(横浜美術館館長)
坂戸 勝(国際交流基金参与)
川口 良一(横浜市開港 150 周年・創造都市事業本部長)
森 茂雄(NHK 視聴者サービス局長)
町田 智子(朝日新聞社事業本部長)

<アドバイザー・コミッティー(特別委員会)>

伊東 豊雄(建築家)
佐々木謙二(横浜商工会議所会頭)
小林 康夫(東京大学大学院総合文化研究科教授)
堤 清二((財)セゾン文化財団理事長)
根本 二郎(日本郵船(株)名誉会長)
原 俊夫(原美術館館長)
日比野克彦(美術家、横浜開港 150 周年記念イベントプロデューサー)
福武總一郎(株)ベネッセコーポレーション代表取締役会長 兼 CEO)
福原 義春(株)資生堂名誉会長)
御手洗富士夫(社団法人日本経済団体連合会会長、キヤノン(株)代表取締役会長)
宮田 亮平(東京藝術大学学長)
森 英恵(ファッション・デザイナー)
森 稔(森ビル(株)代表取締役社長)
柳 善博(福岡アジア美術館館長)

<インターナショナル・コミッティー(特別委員会)>

デヴィッド・エリオット(シドニー・ビエンナーレ 2010 ディレクター、元森美術館館長)
酒井 忠康(世田谷美術館館長)
中村 信夫(現代美術センターCCA 北九州ディレクター)
ホー・ハンルー(サンフランシスコ・アート・インスティテュート ディレクター)
ウテ・メタ・バウアー(MIT 建築学部ヴィジュアル・アーツ・プログラム ディレクター、準教授)
アンジェラ・ヴェッテエーゼ(モデナ市ギャラリー ディレクター)
イ・インスク(李 仁淑、釜山博物館館長)
クオ・キアン・チョウ(シンガポール美術館館長)



参加作家一覧

作家名(ローマ字)	作家名	出身国・地域
Marina Abramović	マリーナ・アブラモヴィッチ	旧ユーゴスラビア
Arakawa Ei and Mukai Mari	荒川 匠と向井麻理	日本
John M. Armleder	ジョン・M. アームレーダー	スイス
Matthew Barney	マシュー・バーニー	米国
Jérôme Bel	ジェローム・ベル	フランス
Ulla von Brandenburg	ウラ・フォン・ブランデンブルグ	ドイツ
Cao Fei	ツァオ・フェイ / 曹斐	中国
Paul Chan	ポール・チャン	中国 / 米国
Chelfitsh (Okada Toshiki)	チェルフイツチュ(岡田利規)	日本
Cho Minsuk and Joseph Grima with Storefront Team	チョウ・ミンスクとジョセフ・グリマ & ストアフロント・チーム	韓国 + 米国
Nikhil Chopra	ニキル・チョプラ	インド
Tony Conrad	トニー・コンラッド	米国
Keren Cytter	ケレン・シタール	イスラエル
Hanne Darboven	ハンネ・ダルボーフェン	ドイツ
Trisha Donnelly	トリシャ・ドネリー	米国
Michael Elmgreen & Ingar Dragset	マイケル・エルムグリーン & インガー・ドラッグセット	デンマーク + ノルウェー
Peter Fischli & David Weiss	ペーター・フィッシュリ & ダヴィッド・ヴァイス	スイス
Luke Fowler and Tsunoda Toshiya	ルーク・ファウラーと角田俊也	英国 + 日本
Mario García Torres	マリオ・ガルシア・トレス	メキシコ
Douglas Gordon	ダグラス・ゴードン	英国
Rodney Graham	ロドニー・グラハム	カナダ
Shilpa Gupta	シルパ・グプタ	インド
Haino Keiji	灰野敬二	日本
Sharon Hayes	シャロン・ヘイズ	米国
Christian Holstad	クリスチャン・ホルスタッド	米国
Kuswidananto a.k.a. Jompet	クスウィダナント・ジョンペット	インドネシア
Joan Jonas	ジョーン・ジョナス	米国
Miranda July	ミランダ・ジュライ	米国
Mike Kelley	マイク・ケリー	米国
Hassan Khan	ハッサン・カーン	エジプト
Pichet Klunchun	ピチェ・クランチェン	タイ
Terence Koh	テレンス・コー	中国 / カナダ



作家名(ローマ字)	作家名	出身国・地域
Kosugi Takehisa	小杉武久	日本
Mark Leckey	マーク・レッキー	英国
Tim Lee	ティム・リー	韓国／カナダ
Jorge Macchi and Edgardo Rudnitzky	ホルヘ・マキと エドガルド・ルドニツキー	アルゼンチン
Paul McCarthy and Damon McCarthy	ポール・マッカーシーと デーモン・マッカーシー	米国
Jonathan Meese	ヨナタン・メーゼ	ドイツ
Gustav Metzger	グスタフ・メツガー	ドイツ／英国
Naito Rei	内藤礼	日本
Nakanishi Natsuyuki	中西夏之	日本
Nakaya Fujiko	中谷芙二子	日本
Hermann Nitsch	ヘルマン・ニツチュ	オーストリア
Ohmaki Shinji	大巻伸嗣	日本
Ono Yoko	オノ・ヨーコ	日本
Pak Sheung Chuen	パク・シュウン・チュエン／白雙全	中国
Philippe Parreno	フィリップ・パレノ	フランス
Falke Pisano	ファルケ・ピサノ	オランダ
Michelangelo Pistoletto	ミケランジェロ・ピストレット	イタリア
Mathias Poledna	マティアス・ポレドナ	オーストリア
Stephen Prina	スティーヴン・プリナ	米国
Nick Relph & Oliver Payne	ニック・レルフ&オリヴァー・ペイン	英国
Pedro Reyes	ペドロ・レイエス	メキシコ
Jimmy Robert	ジミー・ロベール	フランス領 グアドループ
Sasamoto Aki	笹本晃	日本
Tino Sehgal	ティノ・セーガル	英国／ドイツ
Tanaka Min	田中泯	日本
Teshigawara Saburo	勅使川原三郎	日本
Rirkrit Tiravanija	リクリット・ティラヴァニヤ	タイ／米国
Tsui Kuang-Yu	ツイ・クワンユー／崔廣宇	台湾
Danh Vo	ダン・フォー	ベトナム／ デンマーク
Tris Vonna-Michell	トリス・ヴォナ=ミッシェル	英国
Claude Wampler	クロード・ワンプラー	米国

＜特別展示＞ H BOX

エルメスが世界巡回している映像上映ユニット H BOX を、横浜トリエンナーレの会期にあわせて大さん橋国際客船ターミナルにおいて公開した。

- ・ 企画制作：エルメス
- ・ キュレーター：ベンジャミン・ウェイル
- ・ 設計：ディディエ・フィウザ・フォスティノ
- ・ 参加アーティスト：
アリス・アンダーソン、ヤエル・バルタナ、セバスティアン・ディアズ・モラレス、ドラ・ガルシア、ユディット・クルタグ、ヴァレリー・ムレジャン、シャリアー・ナシャット、ツエ・スーメイ(謝素梅)
- ・ 建築仕様：
アルミニウム製、高さ 2.8m 幅 6.5m 奥行 4.92m、全重量 2,600kg、最大収容人数 10 人

開催記録

- I 入場者数
- II 収支決算
- III 会期中のイベント・関連プログラム
- IV 教育プログラム
- V ボランティア
- VI 広報
- VII ガイドブック・カタログ
- VIII 地域との連携



I 入場者数

第3回展では、有料会場が4会場となり、その合計入場者数は30万人を数えた。さらに3箇所の無料会場のほか、作家が横浜の街を移動しながら会期中に行なったプロジェクトの集客数をも含めれば、トリエンナーレの一部なりとも観た方の総数は、50万人を越えた。

1. 入場者数

306,633人(有料4会場の合計入場者数、平均3,881人/日)

有料入場者数: 262,372人(86%)

無料入場者数: 44,261人(14%、招待券利用者、小・中学生を含む)

(1) 有料4会場入場者内訳

会場名	入場者数
新港ピア	107,427
日本郵船海岸通倉庫	84,681
赤レンガ倉庫1号館	98,504
三溪園	16,021
合計	306,633

(2) 無料3会場入場者内訳

会場名	入場者数
大さん橋	27,710
ランドマークプラザ(8/1-10/26)	109,789
赤レンガ倉庫1号館	45,271
合計	182,770

- ・ 有料4会場合計入場者数 306,633人(平均3,881人/日)
 - ・ 無料3会場合計入場者数 182,770人(平均2,314人/日)
 - ・ 屋外プロジェクト観覧者数 64,521人(大巻プロジェクト、市内各所で展開)
- 合計 553,924人(平均7,024人/日)

2. 入場料金

区分	当日券	前売券	団体券	特別チケットパック
一般	1,800	1,600	1,500	3,000
大学生	1,300	1,100	1,000	
高校生	700	500	400	

チケット販売総数: 92,559枚



Ⅱ 収支決算

◎ 平成 18 年度

収入 (単位:円)

項目	決算額
国際交流基金分担金	2,500,000
横浜市分担金	15,000,000
カタログ等販売収入	671,425
協賛金・助成金	2,841,050
その他	4,545
合計	21,017,020

支出

項目	決算額
広報費	4,839,134
専門家海外旅費	1,186,680
専門家国内旅費	303,740
人件費	29,950
事務局費	9,193,651
業務委託費	4,091,168
合計	19,644,323

次年度への繰越金 1,372,697

◎ 平成 19 年度

収入 (単位:円)

項目	決算額
国際交流基金分担金	100,000,000
カタログ等販売収入	169,100
前年度繰越金	1,372,697
その他(利息)	109,384
合計	101,651,181

支出

項目	決算額
展示制作経費	3,357,953
会場関連経費	39,479,625
広報費	12,417,438
関連行事経費	968,728
入場券経費	4,266,150
専門家海外旅費	2,535,705
専門家国内旅費	428,200
業務委託費	31,750,411
事務局費	6,197,939
合計	101,402,149

次年度への繰越金 249,032

◎ 平成 20 年度

収入 (単位:円)

項目	決算額
国際交流基金分担金	206,271,123
横浜市分担金	312,666,797
入場料収入	150,040,143
カタログ等販売収入	25,890,961
協賛金・助成金	40,974,544
使途指定協賛金	57,259,738
前年度からの繰越金	249,032
合 計	793,352,338

支出

項目	決算額
展示制作経費	278,867,130
会場関連費	149,535,211
会場運営費	160,021,218
広報費	48,058,994
カタログ等経費	22,656,649
関連行事費	9,814,659
教育プログラム	4,562,386
入場券経費	6,581,180
ボランティア経費	4,252,287
専門家海外旅費	1,772,654
専門家国内旅費	763,760
業務委託費	36,482,563
人件費	2,689,687
事務局費	10,414,353
使途指定協賛金による支出経費	56,879,607
合 計	793,352,338



Ⅲ 会期中のイベント・関連プログラム

パフォーマンスな要素を重視した横浜トリエンナーレ 2008 では、参加作家によるパフォーマンスを、赤レンガ倉庫の 3 階ホールを中心に数多く実施した。特にオープニングの 3 連休(9 月 13 日～15 日)は、来日した作家によるパフォーマンスを集中して実施した。また会期を通じて、週末を中心に多彩なイベントを組み合わせ実施し、祝祭感の醸成に努めた。

1. オープニング関連行事

(1) 内覧会

9 月 12 日(金) 10:00～20:00(三溪園のみ 16:30 まで)

(2) オープニング・レセプション

9 月 12 日(金) 18:00～20:00 大さん橋ホール

出席者は、内覧会と合わせて 1,260 名(美術関係者、プレス、大使館関係者、文化人、スポンサー等)。このうち、海外からの来客は 180 人(15%)を数えた。

(3) 記念トーク「Crevasse Time」

出演:ディレクター、キュレーター、一部参加作家(ミランダ・ジュライ、中西夏之、内藤礼、トニー・コンラッド、スティーヴン・プリナほか)

日時:2008 年 9 月 13 日(土) 12:30～14:30

会場:横浜シンポジア

2. 会期中のイベント、関連プログラム

(1) 参加作家によるパフォーマンス

オープニング時を中心に期日限定の本格的なパフォーマンスが披露される中、大巻伸嗣は、横浜市内で場所を移動しながら 63 日にわたってシャボン玉プロジェクトを展開した。また、田中泯は不定期に横浜の街に出て、「場踊り」を繰り返した。ティノ・セーガルとクロード・ワンプラーは、パフォーマンスを組み込んだ「ライブ・ワーク」を連日公開した。

月日	曜日	時間	パフォーマンス名	アーティスト	会場
9/12	金		薄明	ホルヘ・マキと エドガルド・ルドニツキー	三溪園
9/12	金	16:00- 17:00	ダンテを読む	ジョン・ジョナス	赤レンガホール
9/13	土		薄明	ホルヘ・マキと エドガルド・ルドニツキー	三溪園
9/13	土	11:00- 15:00	Remembering modifying developing	笹本晃 with アルトゥーロ・ヴィディック	NYK
9/13	土	11:00-	無題	ミケランジェロ・ピストレット (アシスタント)	新港ピア



月日	曜日	時間	パフォーマンス名	アーティスト	会場
9/13	土	11:00	Dr. NO-METABOLISM IN MOOMINGYM like SOLDIER-FLASH-BLUE de MING (BABYKINGKONG IS BACK IN FANTOMAS-GYM) thanks... 1912-2012	ヨナタン・メーゼ	新港ピア
9/13	土	10:30- 11:30	ダンテを読む	ジョン・ジョナス	赤レンガホ ール
9/13	土	11:45- 12:45	Java's Machine Phantasmagoria	ジョンベット & ユディ・アフマ ッド・タジュディン	新港ピア
9/13	土	13:00- 18:00	時間の破片 - Fragments of Time	勅使川原三郎 + 佐東利穂子	NYK
9/13	土	14:00- 14:30	Figure de Style	ジミー・ロベール	NYK
9/13	土	14:30- 15:00	最大の過ち	クリスチャン・ホルスタッド and クロード・ワンブラー	赤レンガホ ール
9/13	土	16:00- 16:40	(タイトルなし)	マティアス・ポレドナ with スティーヴン・プリナ	赤レンガホ ール
9/14	日	11:00- 15:00	Remembering modifying developing	笹本晃 with アルトゥーロ・ヴィディック	NYK
9/14	日	13:30- 14:30	INCIDENCE	ハッサン・カーン	赤レンガホ ール
9/14	日	15:30- 16:30	不可視の小猿	フィリップ・パレノ with ジェイ・ジョンソン	赤レンガホ ール
9/14	日	19:00- 21:30	エクスペリメンタル・サウンド・プログラム #01	スティーヴン・プリナ、インキ ャパシタンツ、トニー・コンラ ッド+ジム・オルーク	赤レンガホ ール
9/15	月祝	11:00	ホームレスネス、ユーミン・シティーズ	荒川医と向井麻理	新港ピア
9/15	月祝	11:00- 15:00	Remembering modifying developing	笹本晃 with アルトゥーロ・ヴィディック	NYK
9/15	月祝	14:00- 15:00	灰野敬ニソロ	灰野敬二	赤レンガホ ール
9/15	月祝	19:00- 21:30	エクスペリメンタル・サウンド・プログラム #02	角田俊也 & ルーク・ファウラ ー、マーカス・シュミックラ ー、ウィリアム・ベネット	赤レンガホ ール
9/20	土	19:00- 21:00	エクスペリメンタル・サウンド・プログラム #03	ロビン・フォックス、 メルツバウ	赤レンガホ ール
9/21	日	19:00- 21:30	エクスペリメンタル・サウンド・プログラム #04	POP(ズビグニエフ・カルコウ スキ&ピタ)、オーレン・アン バーチ+スティーブン・オマ リー+ジム・オルーク トリオ	赤レンガホ ール
9/23	日	19:00- 20:30	小杉武久コンサート	小杉武久	赤レンガホ ール
9/27	土	13:00- 18:00	時間の破片 - Fragments of Time	勅使川原三郎 + 佐東利穂子	NYK
9/27	土	14:00- 15:20	フリータイム	チェルフィッチュ	赤レンガホ ール
9/27	土	18:00- 19:20	フリータイム	チェルフィッチュ	赤レンガホ ール



月日	曜日	時間	パフォーマンス名	アーティスト	会場
9/28	日	13:00-18:00	時間の破片 - Fragments of Time	勅使川原三郎 + 佐東利穂子	NYK
9/28	日	14:00-15:20	フリータイム	チェルフィッチュ	赤レンガホール
9/28	日	18:00-19:20	フリータイム	チェルフィッチュ	赤レンガホール
10/4	土	13:00-18:00	時間の破片 - Fragments of Time	勅使川原三郎 + 佐東利穂子	NYK
10/5	日	13:00-18:00	時間の破片 - Fragments of Time	勅使川原三郎 + 佐東利穂子	NYK
10/25	土	13:00-18:00	時間の破片 - Fragments of Time	勅使川原三郎 + 佐東利穂子	NYK
10/25	土	20:00-21:30	身体を伴うパーカッション・ダンス	灰野敬二	横浜美術館
10/26	日	13:00-18:00	時間の破片 - Fragments of Time	勅使川原三郎 + 佐東利穂子	NYK
11/1	土	13:00-18:00	時間の破片 - Fragments of Time	勅使川原三郎 + 佐東利穂子	NYK
11/1	土	18:30-20:30	ピチェ・クランチェンと私	ジェローム・ベル&ピチェ・クランチェン	赤レンガホール
11/2	日	13:00-18:00	時間の破片 - Fragments of Time	勅使川原三郎 + 佐東利穂子	NYK
11/2	日	12:00-14:00	ピチェ・クランチェンと私	ジェローム・ベル&ピチェ・クランチェン	赤レンガホール
11/15	土	10:00-18:00	ヨギ・ラジ・チトラカー:メモリー・ドローイング IV	ニキル・チョブラ	NYK
11/15	土	13:00-18:00	時間の破片 - Fragments of Time	勅使川原三郎 + 佐東利穂子	NYK
11/16	日	13:00-18:00	時間の破片 - Fragments of Time	勅使川原三郎 + 佐東利穂子	NYK
11/21	金	19:00-21:30	エレクトロニクス	灰野敬二	赤レンガホール
11/30	日	15:00-16:00	光の道	オノ・ヨーコ	赤レンガホール
不定期			場踊り	田中泯	横浜市内各所
不定期			Memorial Rebirth	大巻伸嗣	横浜市内各所

(2)トリエンナーレ・トーク

展覧会のテーマ「タイムクレヴァス」をキーワードに、建築家や社会学者等のゲストを招き、水沢ディレクターとのトーク・イベントを行った(計5回、450名来場。会場はすべて赤レンガ倉庫1号館)。



月日	曜日	時間	タイトル	出演者
10/4	土	15:00- 16:30	無題	西沢立衛
10/11	土	15:00- 16:30	無題	三浦雅士
10/25	土	15:00- 16:30	チェルフィッチュが発見しつつあるもの	岡田利規(チェルフィッチュ)
11/7	金	19:00- 20:30	人はどのように時間を考え出したのか？ 認知科学からの観点	ラファエル・ヌニェス
11/29	土	15:00- 16:30	無題	真木悠介

(3) ナショナル・デー

在京の大使館・文化交流機関との連携により、会期中に参加作家の出身国8カ国の芸術文化を多彩なプログラムを通して紹介した。それぞれの国が独自性豊かな催しを企画し、大使等要人も訪れ盛況のうちに行われた(計8カ国開催、1,590名来場、会場は赤レンガホール他)。

月日	曜日	時間	タイトル	概要
10/12	日	15:00- 21:00	ノルウェー・デー	ノルウェー音楽の演奏会
10/18	土	19:00	アルゼンチン・デー	アルゼンチンタンゴ・ショー&体験レッスン
10/19	日	19:00	スイス・デー	ピアノと尺八の演奏
10/25	土	19:00	カナダ・デー	カナダの短編アニメーションを複数紹介。日本のアートアニメーション作家のトークショー
10/26	日	15:00	オーストリア・デー	ビデオ作品上映、対談
11/1	土	14:00- 15:00	メキシコ・デー	メキシコ現代美術および音楽の紹介
11/2	日	15:00- 21:00	フランス・デー	映画上映、レクチャー、ライブ音楽、パフォーマンス
11/3	月祝	15:00- 21:00	ドイツ・デー	アーティストトーク、ドイツ映画祭2008より短編映画上映

(4) リングドーム・イベント(協賛:ブルームバーク)

チョウ・ミンスクによる出品作品「リングドーム」を会場とし、若手アーティストによるダンスや音楽、トーク・イベント等を行った。屋外スペースではあったが、天候に恵まれ一度も中止することなく、若者を中心とした多くの来場者が訪れた(計22回、10,330名来場、会場はすべて運河パーク内のリングドーム)。



シリーズ名	概要
オブビート談話室	演劇、ダンス、アート、文学の世界で活躍するゲストを招いてのトーク (9/28、10/13、10/26、11/9、11/23 の 5 回実施、ナビゲーター:住吉智恵)
idance 80's	1980 年代生まれの若手アーティストによる、次代の身体表現の可能性を探るシリーズ(9/27、10/11、10/18、11/8、11/15、11/29 の 6 回実施、企画協力:Offsite Dance Project)
Rising Tunes	新進の若手アーティストを中心とした実験音楽やジャズなど、様々なジャンルのサウンド・イベント・シリーズ(9/23、10/5、10/19、10/25、11/22、11/24、11/30 の 7 回実施)
その他	第 2 回展キュレーターの芹沢高志氏と水沢ディレクターとの対談ほか (10/25、11/21、11/30、11/30 の 4 回実施)

IV 教育プログラム

教育プログラムは、ギャラリートークを中心に組み立てた。出展作品と鑑賞者をどのように橋渡しするかを検討し、対話型のグループ鑑賞を企画した。実施にあたっては、ボランティアスタッフを中心に現場において研鑽を重ね、鑑賞者のサポートをしながら意見を引き出すことに努めた。会期中を通しての各種プログラムの総参加者総数は、4,057 名にのぼった。

1. ギャラリー・トーク

(1)ディレクター・トークツアー(計 2 回、103 名参加)

水沢総合ディレクターによるガイドツアー。

(2)ライター・トークツアー(計 6 回、123 名が参加)

ガイドブック執筆者によるガイドツアー。

(3)ひよこツアー(計 3 回、33 名が参加)

乳幼児とその保護者のためのガイドツアー。

2. ガイド・トーク(ボランティアガイドによる定期トークツアー)

(1)一般向け(計 186 回、1,492 名が参加)

(2)子供向け(計 25 回、50 名が参加)

3. 学校及びその他の教育団体受け入れ(計 39 回、2,215 名が参加)

「自由鑑賞」、「ガイド後自由鑑賞」、「ガイド付き鑑賞」の3つのコースを用意し、小学校 12 校、中学校 5 校、高等学校・専門学校 7 校などを受け入れた。参加校は主に、横浜市内の小・中学校、高校・専門学校は美術系・デザイン系の学校となった。当初小学生には難しい内容かと思われたが、先生方も意外と言うほどに子供たちの反応は良かった。

4. 「パナソニック・キッズスクール・ワークショップ」(計4回、41名が参加)

パナソニック(株)よりカメラやプリンターの提供を受けて実施された子供向けのワークショップ。子供たちは、会場内で展示作品を自由に撮影し、3枚の写真を貼り合わせることで「作品」を制作した。会期中、「作品」は会場内のコーナーに掲出され、アートの夢を伝えた。

5. キッズ・キュレーター(計16回、観客総数470名)

コスモ石油(株)の協賛を得て実施された子供たちによるガイド・トークツアー。小学5年生～中学2年生(のべ43名)が「キッズ・キュレーター」として、来場者を案内して会場内を巡った。子ども独自の自由な解釈が、現代アートの魅力を来場者に伝えるのに一役買った。

6. ボランティアスタッフ向けの研修会

8月から9月にかけて、計5回の研修会を実施した。またガイド・トークが始まった10月以降も定例会を計4回実施し、反省会等を行った。

7. 音声ガイド

作品を判りやすく解説する音声ガイドを有料(500円)でメイン2会場(新港ピア、日本郵船海岸通倉庫)において貸し出した。会期中、約6,888人が利用した。作家インタビューも一部盛り込んだ内容は好評を博した。

V ボランティア

2008年4月より会期終了まで、チラシやホームページ等を通じて募集を行った。また、7月には説明会を3度実施し、開会直前の8月末には会場見学会を実施。最終的には過去最大の1,510名の登録者数を得た。

1. 活動内容

(1) 会場運営スタッフ

各会場の作品の看視、インフォメーション(会場内のご案内、音声ガイド貸し出し、他会場のご案内)、イエノイエ(総合インフォメーション)の補助 など

(2) 関連プログラムスタッフ

シンポジウムやリングドームで行われたイベントの補助(会場準備・設営等)など

(3) 教育プログラムスタッフ

ガイドツアーの実施(10/1～11/30 新港ピア・NYK)、ワークショップの補助など(8月～9月に5回の研修を行ったほか、10月～11月に4回、交流を兼ねた打ち合わせを実施)。

(4) 事務局スタッフ

広報(チラシ配布)、資料翻訳補助など

(5) 展示スタッフ

チョウ・ミンスク作品展示補助、ティノ・セーガル作品展示補助、大巻伸嗣作品展示補助、ヨナタン・メーゼ作品撤収補助

2. スタッフ専用 web サイト

ボランティアスタッフ専用の web サイトを開設し、活動登録状況の確認や、急にスタッフが必要になった際の募集等に活用された。

3. 待遇

今回は、若者に人気のあるアパレルメーカーBEAMS より、スタッフ用のオリジナル T シャツと防寒用オリジナル・ポンチョの提供を受け、スタッフ全員が着用して活動に参加した。また参加回数に応じたポイント制によって、入場券や展覧会カタログのプレゼントを実施し、より多くの参加促進を試みた。

4. アンケート結果

活動参加中の 240 名を対象にアンケート調査を行った結果は、以下のとおり。

(1) 年齢

区分	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上
割合	11%	24%	29%	17%	9%	10%

(2) 居住地

区分	横浜市内	神奈川県(横浜市以外)	神奈川県外
割合	83%	11%	6%

(3) 職業

区分	学生	会社員	自由業	公務員	無職	その他
割合	19%	36%	5%	6%	19%	15%

(4) トリエンナーレ・ボランティア参加歴

区分	参加していない	過去2回とも参加	第2回展に参加	無回答
割合	81%	3%	12%	4%

(5) 参加回数(半日=1回としてカウント)

区分	0回	1回	2~5回	6~10回	11~20回	21回以上
割合	4%	12%	24%	23%	22%	15%

(6) 活動内容への満足度

区分	大変満足	満足	不満	大変不満
割合	26%	58%	12%	4%

(7) 次回の参加意向

区分	参加したい	状況によっては参加したい	わからない	参加したくない	その他
割合	56%	25%	9%	2%	8%

(8) 登録理由(回答の多かった選択肢)

- ・美術に関心があるから 26%
- ・ボランティア活動に関心があるから 20%
- ・横浜での活動なので 20%
- ・より作品を理解したかったので 10%
- ・仲間ができると思ったので 6%
- ・国際交流に関心があるので 5%

(9) 参加した感想

- ・楽しかった 32%
- ・情報が得られた 27%
- ・生活にハリが出た 12%
- ・友達ができた 12%
- ・自分が変わった 5%
- ・体がきつかった 3%
- ・その他 9%

VI 広報

NHK と朝日新聞社の協力を得ながら、多面的な広報活動を展開した結果、前回展以上のパブリシティ掲載件数(新聞、雑誌、TV、ラジオ、WEB等)を達成、広告換算値は14億円を超えると試算される。また、ブログの導入、プレス向け画像ダウンロード・サービスなど、インターネットを通じた広報にも力を注いだ。海外では、アジアの国際展と連携をはかり、ヴェニス、イスタンブールのビエンナーレのオープニング会場において共同記者会見を実施し、国際的な注目を集めた。

1. 記者発表、イベント

計4回の記者発表に加え、開幕1年前に公開シンポジウム、1カ月前の段階で先行作品披露セレモニーを行った。会期中は入場者数の節目ごとにセレモニーも実施した。

期日／場所	実施事項	内容
2006年11月29日(水) 国際交流基金国際会議場	第1回記者発表	総合ディレクター発表(出席者100名)
2007年11月18日(日) 国際交流基金国際会議場	公開シンポジウム	「国際展にいま問われているもの」と題し、総合ディレクターと5名のキュレーターが集まり開催(出席者276名)
2008年3月18日(火) 国際交流基金国際会議場	第2回記者発表	一部参加作家の発表(出席者127名)
2008年6月25日(火) 赤レンガホール	第3回記者発表	参加作家の発表、会場見学(出席者201名)
2008年8月1日(金) ランドマークプラザ	先行作品披露セレモニー	エルムグリーン&ドラッグセット作品の先行公開、ノルウェー音楽の演奏
2008年9月12日(金) 赤レンガホール他	内覧会・レセプション 第4回記者発表	内覧会、レセプション、赤レンガホールでの記者発表
2008年11月9日(日) 新港ピア	来場者20万人突破 セレモニー	記念品贈呈、キッズ・キュレーター、音楽隊の演奏、風船
2008年11月30日(日) 新港ピア	来場者30万人突破 セレモニー	記念品の贈呈

2. 記者登録数

取材、写真撮影のため、トリエンナーレ会場を訪れ、記者登録を行なった記者は、国内外合わせて約600名に及んだ。そのうちの半数がオープニング日に集中した。

	日本人記者	外国人記者	合計
オープニング	272	54	326
会期中	182	82	264
合計	454	136	590

3. プレスリリース

メディア関係者のリスト1,200件を更新し2006年11月より会期終了まで、23回のリリースを配信した。方法は郵送やFAX、Eメール等、情報の量や内容に応じて適宜使い分けを行った。また同時に、美術関係者のリスト1,400件の更新作業も行った。

4. パブリシティ

国内外でのトリエンナーレ関連無償パブリシティ掲載総数は2009年2月時点で1,233件にのぼった(国内1,068件、海外165件)。メディアごとの件数内訳は以下のとおり。

【国内】新聞422、雑誌329、TV39、ラジオ36、Web媒体176、フリーペーパー66

【海外】新聞・雑誌78、Web69、その他18

	国内件数	海外件数	合計
第2回展	1,049	40	1,089
第3回展	1,068	165	1,233



- * 海外件数は、第2回展に比して4倍増(21カ国・地域のメディアが取り上げる)
- * 掲載総件数の広告換算値は約14億円以上と試算

<主な掲載紙等>

- 【韓国】中央日報、連合ニュース、南道日報、光南日報、月刊美術
- 【中国】南方周末、典藏今芸術、Modern Weekly, Art Exit, Time Out Hong Kong
- 【タイ】The Sunday Nation, Bangkok Post
- 【インドネシア】Kompas, C Arts, Visual Arts
- 【英国】Frieze, Financial Times, The Art Newspaper
- 【フランス】Le Figaro, Beaux Arts magazine, L'Optimum
- 【イタリア】Il gionale dell'Arte, Il Sole 24 Ore
- 【カナダ】The Globe and Mail
- 【米国】Artforum, Art in America, Art Asia Pacific, TIME(香港・米国)
- 【メキシコ】Exelsior
- 【その他】ART - Das Kunstmagazin(ドイツ)、Lapiz(スペイン)、International Herald Tribune、Real Time(豪州)
- 【日本】NHK、フジテレビ、TBS、TVK、FM 横浜、ラジオ日経、J-WAVE
朝日、毎日、読売、サンケイ、日経、神奈川新聞、各地方紙、専門紙
アエラ、新建築、美術手帖、high fashion, Esquire, カーサ・ブルータス

5. 広報用制作物

展覧会全体のアート・ディレクションについてはブルーマークの菊地敦己氏に依頼し、ポスター等の広報用印刷物からノートやクリアフォルダ、バック等のアイテムも展開。主な印刷物の種別と制作枚数は以下のとおり。ポスター、チラシは主に全国の美術館や学校、公共機関等に発送し、掲出を依頼した。

- ・ポスター 6種(B1、B2、B3) 合計 15,800枚
- ・チラシ 6種合計 682,000枚
- ・ポストカード 5種合計 53,000枚
- ・マップ&イベント・スケジュール 4種合計 180,000部

6. 交通広告

横浜市内、および市内へ乗り入れている電鉄を中心に広告出稿した。

社名	広告の内容・枚数等
JR	首都圏観光ポスター(首都圏143駅にのべ340枚掲出)、桜木町駅横断幕、根岸駅駅貼りポスター、JR 東日本秋の横浜お出かけガイド(首都圏各駅で130,000部配布)

東急	観光誘致ポスター(88 駅に 90 枚掲出)、観光誘致チラシ(88 駅で 20,000 枚配布)、横浜みなとみらいブック(100,000 部配布)、窓上ポスター(東横線 170 枚)、中吊りポスター(横浜市広報枠、東急全線 1,950 枚)、たねまる号中吊りポスター・ドア横ポスター(東横線・田園都市線合計 360 枚)
みなとみらい線 (横浜高速鉄道)	みなとみらい駅臨時集中貼り(3 箇所)、駅貼りポスター(6 駅)、馬車道駅大型告知シート、馬車道駅横断幕、馬車道駅柱巻き、馬車道駅エスカレーター
横浜市営地下鉄	駅貼りポスター(全 42 駅)
東京メトロ	銀座線窓上ポスター(250 枚)
横浜市営バス	バスシェルター広告(横浜市内バス停 193 カ所)

7. その他有料広告

交通広告以外では地元 FM 局との連携による番組放送や、みなとみらいエリア一帯で定期的に行われている「タッチ de ゲット・ラリー」を、横浜トリエンナーレの会期にあわせ特別に実施する等、会場周辺に来ている観光客や買物客の取り込みを図った。

媒体名等	広告内容
雑誌 ART iT	美術専門誌 ART iT(季刊)において、A4 カラー1 頁広告を計 4 回掲載
CD ショップ・タワーレコード	フリーペーパー「intoxicate」での記事広告
クロスゲート桜木町	バナー広告
FM 横浜	「アート・ピクニック」と題する番組でトリエンナーレの情報を紹介
ポスターハリス	都内飲食店等へのポスター貼り、チラシ撒き
タッチ de ゲット実行委員会	スイカやパスモを利用したみなとみらいエリアで行われるラリー企画。周ったポイント数に応じて抽選に参加でき、商品が当たる

8. ホームページ

デザインを展覧会全体のディレクションにあわせることでイメージの統一を図るとともに、運用についても一括してデザイナー事務所(ブルーマーク)に委託した。結果的に、2008 年 6 月から半年の間で世界 138 カ国・地域からのアクセス、計 5,160,864 ページビュー(月平均 860,164PV)を記録した。新たな取り組みの主な例は、以下のとおり。

- ・ 毎回変えていたドメインを「yokohamatriennale.jp」に統一
(今後もこのドメインの下にページを構成予定)
- ・ 最新情報をいち早く届けるための体制強化
(ブログの導入、ブログパーツの作成、メールマガジンの発行)
- ・ プレス向けのサービスを強化
(画像ダウンロード、内覧会受付(海外のみ)、問合せフォームの導入など)
- ・ ページ修正を簡易に出来るように体制を整備
(突然のイベント変更にも対応が可能になった)
- ・ Google analytics を活用し、初めて HP のアクセス記録を収集

<ホームページを通じた問い合わせ件数>

日本語:計 564 件

カテゴリー	広報関係	ボランティア	その他	計
2008年7月	10	7	7	24
2008年8月	22	12	40	74
2008年9月	25	4	187	216
2008年10月	10	22	125	157
2008年11月	9	4	55	68
2008年12月	4	0	4	8
2009年1月	11	0	2	13
2009年2月	3	0	1	4
計	94	49	421	564

英語:計 162 件

カテゴリー	広報関係	ボランティア	その他	計
2008年7月	10	4	9	23
2008年8月	15	3	16	34
2008年9月	23	5	14	42
2008年10月	9	2	16	27
2008年11月	9	3	5	17
2008年12月	2	4	4	10
2009年1月	2	0	0	2
2009年2月	1	3	3	7
計	71	24	67	162

9. ハローダイヤル

一般からの問い合わせに対応するため、2008年6月から11月までの間、ハローダイヤルを開設したところ、日本語 5,317 件、英語 78 件の合計 5,395 件の利用があった。最も多かったお問い合わせの内容は、「概要・会期・時間」に関するもの(31.6%)で、「料金」(17.7%)、イベント関連」(12.9%)に関する問い合わせがこれに続いた。

10. 会場外インフォメーションの設置

案内サービスの徹底と広報強化のため、インフォメーションセンター(平田晃久設計、大和ハウス工業(株)協賛)を運河パークに設置し、スタッフが常駐した。同センターの一部スペースでは住宅にまつわる展示も行なった(イエノイエプロジェクト)。またランドマークプラザでは、イベント・スペースに期間限定(2008/8/1~10/26)のインフォメーションコーナーを設置

(楯義明監修、有限会社サイレン製作、ランドマークテナント協力会協力)し、ランドマークプラザにおける大型インスタレーション関連パネルを掲出したほか、トリエンナーレの案内を行なった。

11. 市内広報

来場者数の増加を図るため、特に横浜市民に向けて、以下の広報活動を行った。

- (1) 組織委員会との同時記者発表(07年11月、08年3月)を含め、横浜市政記者に対し、計21回の記者発表を行った。
- (2) 広報よこはま(市内150万世帯へ配布)においてボランティア募集、区民デーを含め計3回(3月(1面)、5月、9・10月(区民デー))、掲載した。
- (3) 新規チラシ作成時、ボランティア募集時に合わせ、計5回にわたり、横浜市内公共施設(316箇所)、市内鉄道駅(105箇所)、教育機関(大学、県内県立高校含む859校)等へポスター、チラシ等を発送し、掲示、配布を依頼した。
- (4) 会期中、地下鉄馬車道駅から新港ピア会場を結ぶ歩道の33箇所に、バナーを設置した。また、新港ピア会場までの導線上にある近隣商業施設内に、トリエンナーレ会場案内図を設置した。
- (5) 開港149周年記念式典、ポートタウンフェスティバル、旅フェア等市内で行われる大規模イベントにブースを出店し、来場者へのPRを行ったほか、横濱JAZZ PROMENADE、横浜市成人式(1月・横浜アリーナ)の会場においてチラシ配布。
- (6) 100円割引券付チラシを作成し、ボランティアの協力のもと、駅や他のイベント会場等で配布。

12. 海外広報

海外広報として、主に以下の取り組みを行なった。今回は、同時期にアジア大洋州の国際展(光州、シドニー、上海、シンガポールの各ビエンナーレ)が重なったことから、これら4つの国際展とグループ「アートコンパス 2008」を結成し、広報やツアーを中心に連携をはかった。

- (1) ヴェニス・ビエンナーレ、イスタンブール・ビエンナーレのオープニング会場におけるアートコンパス共同記者会見の実施
- (2) 主要美術雑誌(frieze, Art Asia Pacific, ARTiT)への広告出稿
- (3) 世界の美術関係者のネットワーク「e-flux」によるメール配信(3回)
- (4) オープニング時に主要プレス関係者13名(アジア5名、米州3名、欧州5名)を招待
- (5) 在外公館、国際交流基金海外事務所、JNTO 海外事務所等を通じた広報活動(ポスター掲示、チラシ配布、ホームページ掲載)
- (6) 北京アートフェアにおける水沢ディレクターのプレゼンテーション、チラシ配布
- (7) ヴェニス・ビエンナーレ会場でのグッズ、チラシ配布
- (8) 海外関係者約500名へのグリーティングカード、および会期直前の「save the date」案内の送付。

Ⅶ ガイドブック・カタログ

はじめに参加作家の解説や会場地図を掲載した「ガイドブック」を開幕前の段階で作成し、その後、実際の展示風景写真を掲載したカタログを制作し、2部構成とした。いずれも日本語と英語のバイリンガル表記とし、デザインは資生堂のインハウス・デザイナー高橋歩氏に委託した。

1. ガイドブック

(1) 内容

- ・各作家の紹介(作家解説、作品写真)
- ・会場案内

(2) 仕様

判型等	A5 判 166 ページ
用紙	表紙＝ヴァンヌーボ F 46/180kg、本文＝テイク GA46/90kg
印刷	表紙＝特色 1c+マット PP+シルク、本文＝4C+マットニス
部数	15,000 部
価格	900 円

2. カタログ

(1) 内容

- ・イントロダクション(水沢勉、キュレーター・チーム)
- ・横浜での展示風景写真、パフォーマンス写真
- ・作家のオリジナルページ(メッセージ、作品写真、その他テキスト)
- ・寄稿テキスト(パメラ・リー、トム・マッカーシー、大森荘蔵)
- ・出品作品リスト

(2) 仕様

判型等	B5 判変型(260cm×684mm)、320 ページ
用紙	表紙＝ヴァンヌーボ F 菊/139kg、本文＝テイク GA46/90kg
印刷	表紙＝2C、本文＝250 頁・4C、62 頁・1C
製本	無線綴・並製本、切りつけ表紙、トレペカバー巻き
部数	8,000 部(初版 5,000 部、2刷 3,000 部)
価格	2,500 円

3. 編集・発行(ガイドブック、カタログ)

編集	三上豊、辺見海、インターパブリカ、横浜トリエンナーレ事務局
デザイン	高橋歩(資生堂)
制作	(株)SG
印刷	大日本印刷(株)
発行	横浜トリエンナーレ組織委員会

VIII 地域との連携

1. 区民デー

市内来場者増を期して、市内18区それぞれで平日および週末各1日の2日間、「区民デー」を設定し、来場者には「再来場券」として入場券1枚の進呈特典を進呈したほか、ガイドツアーを実施した。

2. サポーター

ボランティアに先行する形で、プレイベントの企画立案や自主的な応援活動を行う「市民応援隊(仮称)」として募集を開始し、最終的には「横浜トリエンナーレサポーター」として、260名の登録を得た。主な活動は、

- ・全体会議であるHOP(STEP、JUMP)会議の運営(12回)
- ・フリーペーパー「サポーターズニュース」の発行(8号まで)
- ・市の広報ラジオ番組や、様々なイベントに参加し、トリエンナーレをPR
- ・市民参加型の会場見学イベント「ぐるり3会場ウォーク」
- ・様々な場所で実施するワークショップ「出前アート」
- ・他都市サポーター・ボランティア等との交流
- ・トリエンナーレや現代アートについて気軽に触れる機会を提供するため、様々な講師を招き、「トリエンナーレ学校」を全18回実施(約500人が聴講)
- ・ボランティア結団式の企画運営
- ・サポーターオリジナルグッズ制作・配布
- ・応援企画「トリエンナーレ」「横浜ランタン大通り」

3. タクシー乗務員無料見学 WEEK

街中を走るタクシーの運転手諸氏にトリエンナーレを観てもらい、自らトリエンナーレのガイド役になってもらうため、10月6日～12日で実施。

4. 応援企画

公募により集まった市民・NPO等による20の応援企画を、本展会期前から会期中にあわせて実施した。

【主なもの】

- ・「駅 2008—鶴見線に降りたアートたち」(10月25日～12月7日)
- ・「馬車道まつりに新聞女がやってくる！」(11月2日)
- ・「Take Art Easy」(サポーターによる応援広報:Podcasting番組)

5. 同時期に行った主なイベント

同時期に会場周辺で開催した様々なイベントが、横浜トリエンナーレ 2008 を盛り上げ

た。

(1) THE SEEDS TRIP

山下ふ頭の 8 号物揚場で、ダンボール製の船を製作する公開ワークショップ。日比野克彦氏のプロデュースのもと、約 1,000 人が参加し、約 1 万 8 千人が来場。

(2) 黄金町バザール

違法な特殊飲食店が軒を連ねていた地域で実施した、地域連動型のアートフェスティバル。トリエンナーレとほぼ同期間で開催し、10 万人超が来場した。

(3) BankART Life II

特定非営利活動法人 BankART1929 による、地域と協働し、街に展開するプログラム。市庁舎を展示空間とする「Open!パブリックスペース」などを実施。

アンケート調査結果

<実施概要>

実施日： 2008年11月14日(金)、15日(土)、20日(木)

実施場所： 日本郵船海岸通倉庫

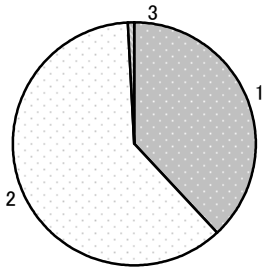
(動線上、展覧会の「最終会場」と位置づけられている会場)

実施方法： 社会調査専門家(関西学院大学社会学部の真鍋一史教授)の協力を得て、アンケート票及び調査実施計画を作成。調査は専従スタッフ4名体制で実施し、できるだけ回答者の属性に偏りが生じないように調査票を配布・回収した。

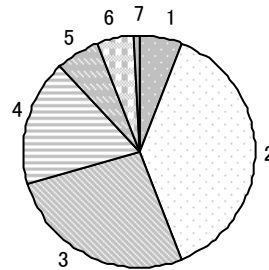
有効回答数： 1,077(平日 325、休日 752)

1. 属性

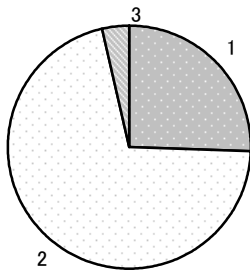
(1) 性別



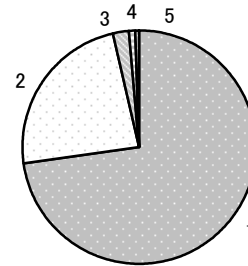
(2) 年齢



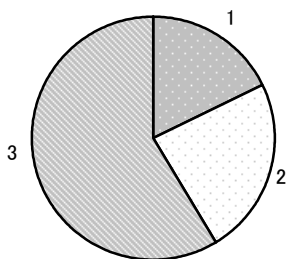
(3) 住まい



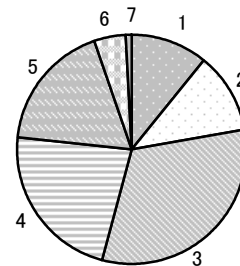
(4) 来場回数



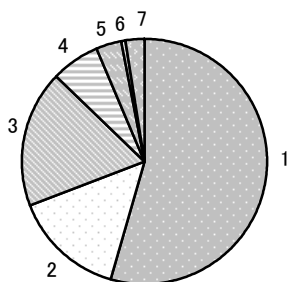
(5) 美術に関する仕事に携わったり、美術を専門的に学んだ経験



(6) 過去1年間で美術展に出かけた回数

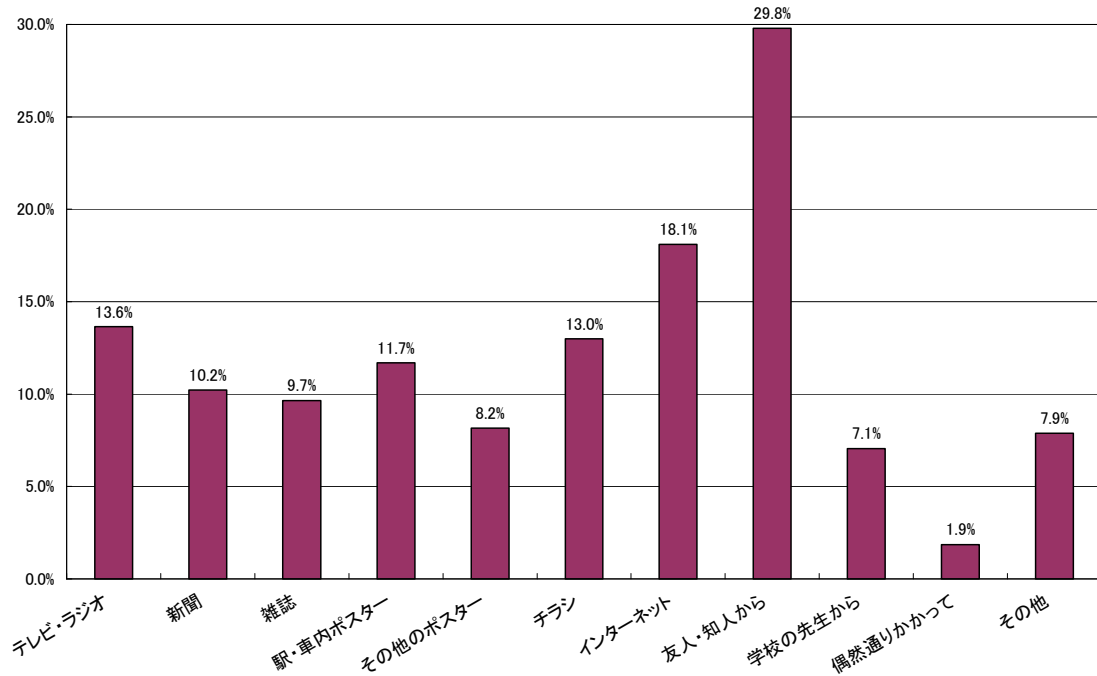


(7) 過去1年間で国際交流イベントに出かけたことがあるか

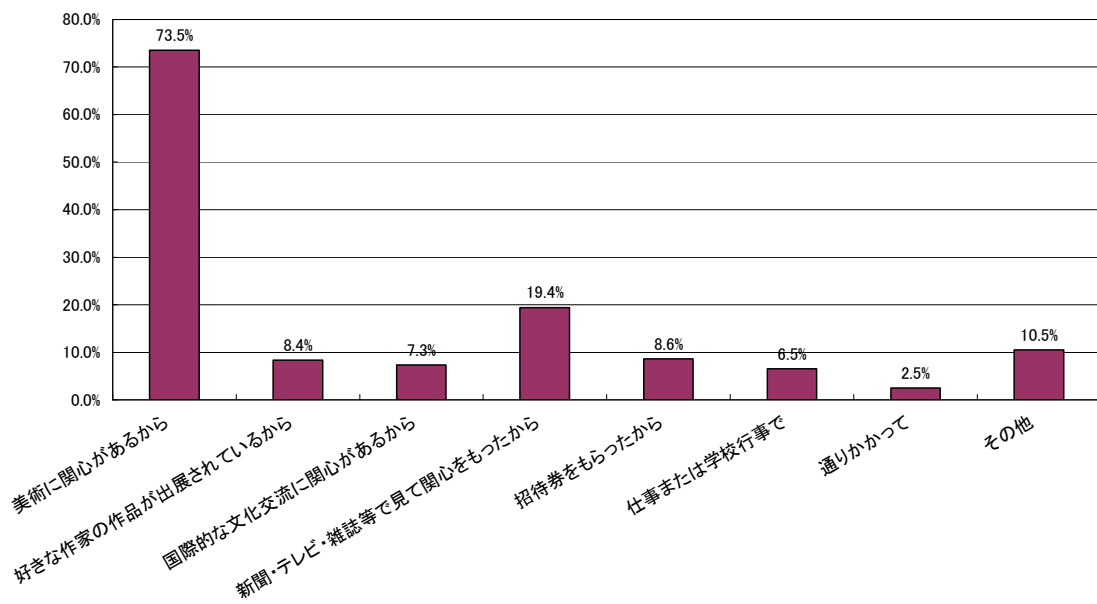


2. アンケート結果

問1 「横浜トリエンナーレ 2008」を何で知りましたか。

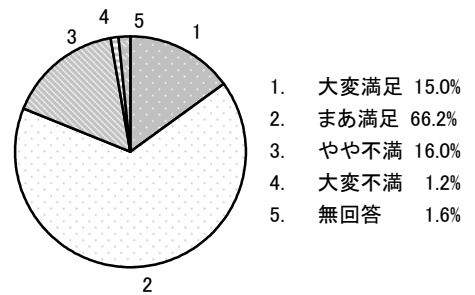
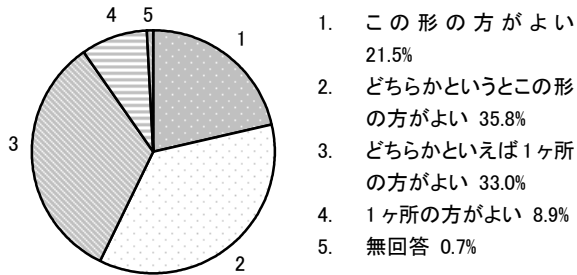


問2 「横浜トリエンナーレ 2008」にいらした理由を選んでください。



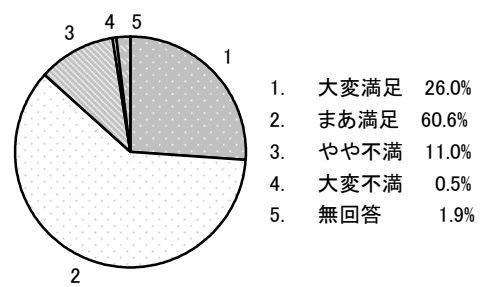
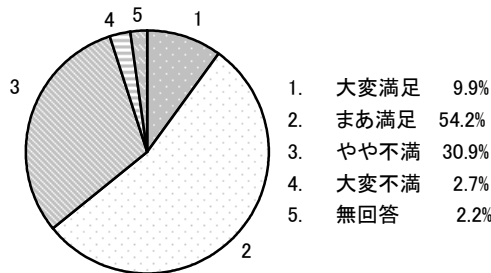
問3 「横浜トリエンナーレ 2008」についてお尋ねします。

(1)メイン展示場が分かれて設置されていることについて (2)展示会全般について (1. 展示会場について)



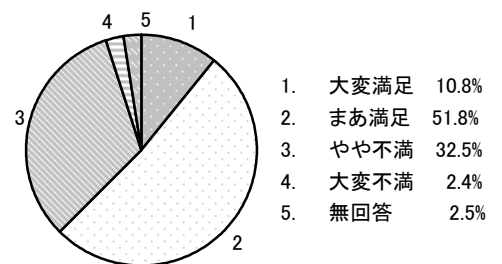
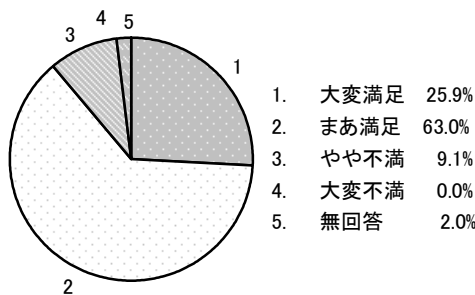
(3)展示会全般について (2. 展示作品について)

(4)展示会全般について (3. 会場スタッフの対応について)



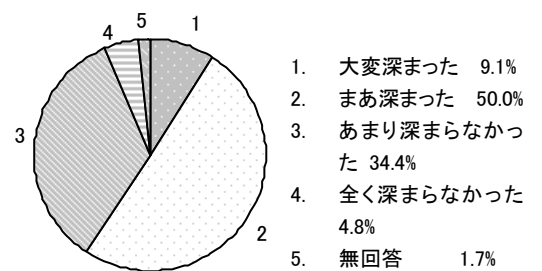
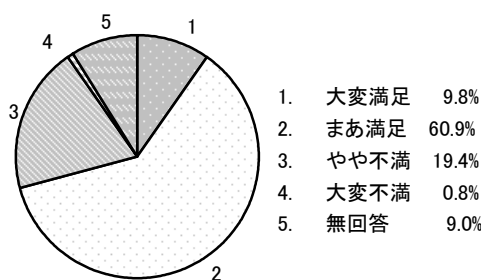
(5)展示会全般について (4. 開催時期について)

(6)展示会全般について (5. 入場料金について)

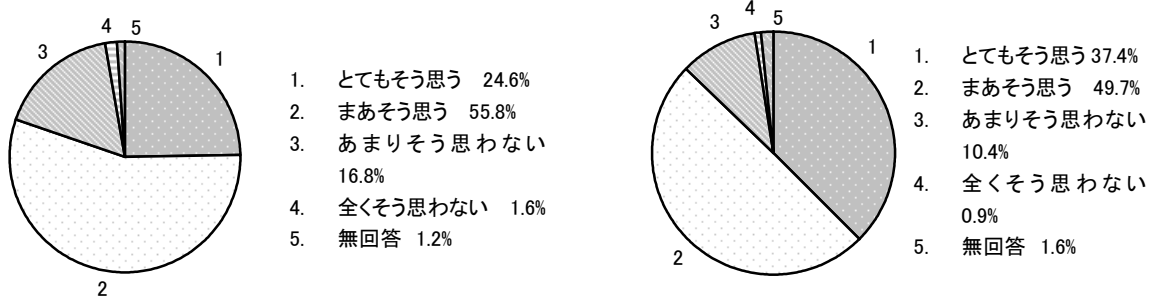


(7)展示会全般について (6. 展覧会全体について)

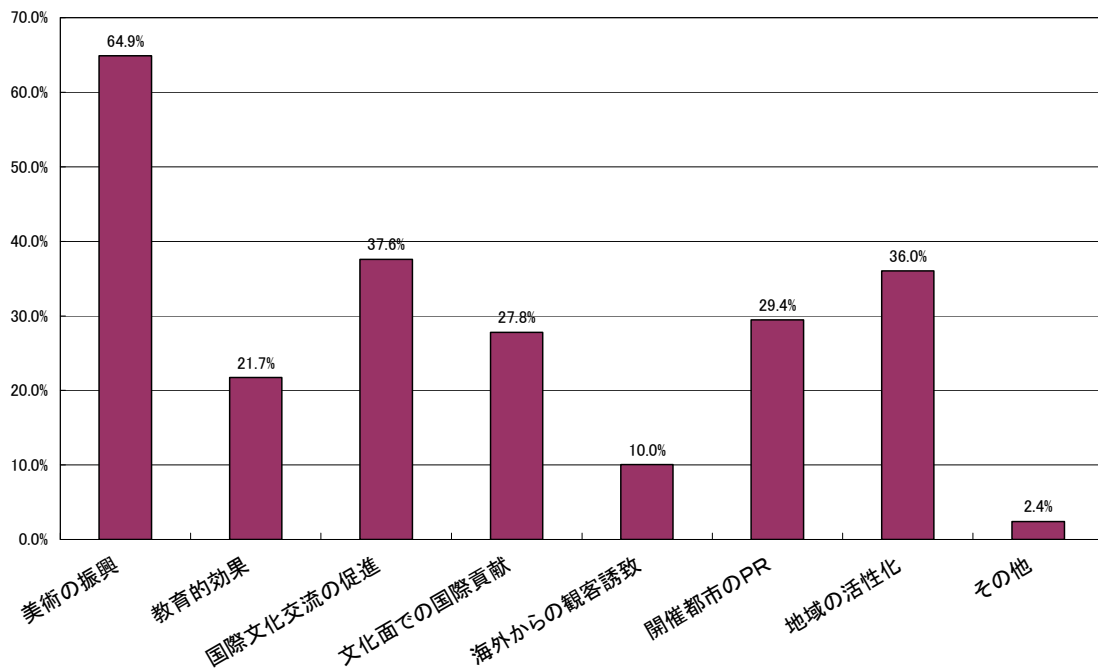
(8)諸外国の美術について理解を深めることができたか



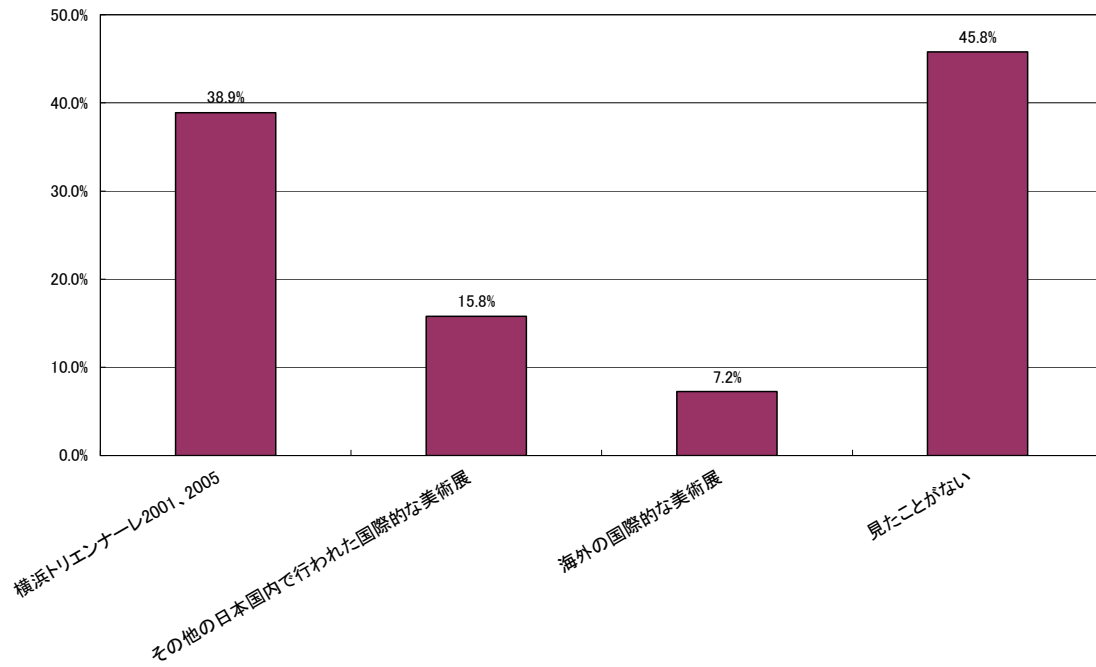
(9) 今後諸外国の美術にもっと触れてみたいと思うようになったか (10) 今後も観に来たいと思うか



(11) 国際的な美術展はどのような効果があると思うか



問4 見たことがある日本国内や海外で行われた国際的な美術展



※ 問3の各設問(8は除く)に関しては、「どちらともいえない」の回答を2等分して集計を行なった。



3. 会場アンケートよりコメント(抜粋)

【全般】

- ・ 全ての会場に行きましたが、とても満足できました。三溪園はアートと自然が見事に融合していて、心を打たれました。ボランティア・スタッフの方が親切な方ばかりで、関心しました。(女性、30歳代)
- ・ 私個人としてはトリエンナーレは楽しく、参加できるイメージをもっていましたが、前回の様に子供も一緒に参加して楽しめる作品がみられませんでした。今回はあまり楽しめませんでした。残念。(女性、40歳代)
- ・ 2001、2005 と来場したが、今まで美術を知らない者でも「なんだろう」と考えるおもしろさがありました。今回は少しそのおもしろさが私の感想としては少なかつたと思います。2001 より家族子ども年配の人も増えていると感じました。そうした人も素直に心を動かされる展覧会を期待します。(女性、20歳代)
- ・ 税金を使ってやるにはムダが多すぎる(男性、60歳代)
- ・ 今後も何十回、何百回と続く展覧会になってほしいです。(男性、20歳代)
- ・ 継続は力なり、たくさん労力いると思いますが、日本を代表するイベントとして続けていって欲しいと思います。(女性、20歳代)
- ・ 前回のトリエンナーレをみた後、“これならもうやらない方がいいよ”と思っていましたが、今回は展示施設のレイアウト、コンセプトと作品のセレクトの関係など前回より格段よくなっていたと思います。次回に期待しています。(男性、20歳代)
- ・ 前回よりも今回の方が良かった。現代アートはコンセプトを聞かないと何だか分からないものが多く、音声ガイドをかりたので理解できたが、かりなかつた人も理解しやすいようなヒントがあるといいと思う。特にこういう大きなイベントはふだんアートを見ない人も見にくると思うから。(女性、20歳代)
- ・ 国際交流が目的としてあるイベントなのだとこのアンケートに答えてはじめて知った。(わかりにくい…)(男性、20歳代)
- ・ 祝祭性の排除と水沢氏のインタビュー記事にあつたが、市民との距離を大きくしているように思える。(男性、30歳代)
- ・ 外国の美術家について、関心をもつことはあつても、その国や背景は見えてこないのが国際的とあまり思わなかつた。(女性、30歳代)

【作品の内容について】

- ・ 英語のネイティブスピーカーでないで、タイトルが全てわかりにくい。(男性、50歳代)
- ・ 平日にも、もう少しイベントを行ってほしいです。(女性、20歳代)
- ・ 映像作品が多いのは、「お祭り」としては、たいへんつらい。このようなものばかりだと、アート系ではない方はもう来なくなってしまいますよ!!(好きでもつらい)(女性、40歳代)
- ・ 今だに西洋美術至上主義的展示ばかりでつかれる。作品のクオリティーには不満。展示方法も考える点多々あり。とにかく名前ばかりが大きな展覧会。(女性、40歳代)
- ・ 自分の味わつた事のないものに触れて、それなりに楽しめました。いろいろな価値観、感性の方がいらつしゃる一つの価値観ではくれない事の故に感動を覚えました。(女性、60歳代)
- ・ 全体的にあまりパワフルな印象はなかつた。(過去に比して)(男性、40歳代)
- ・ キモチ悪い作品がいらなかな…(女性、30歳代)
- ・ もっとサイトスペシフィックな企画があつたとおもしろい。民家とか空ビルとか。ホワイトキューブなのかサイトスペシフィックなのか、中づり感があつたが、1点1点にゆつたりスペースを割いているのはいいと思ひました。
- ・ 国内外のアーティストに多く触れることができるのは良い。欲を言えば、もう少しわかりやすい作品があつてもいいと思う。(男性、20歳代)
- ・ 15歳未満はみられない展示が不満でした。ぎやくに見たくなつてしまうから。差別されてるような気が…。まつている間ひまでした。(女性、19歳以下)
- ・ こういうイベントを継続なざる意欲、有難く思ひます。善良な人々が、時間とお金を費して来ています。が、作品「殊に映像」が、来場者を巻き込んでゆくインパクトに欠けているのは悲しいことです。(男性、60歳代)
- ・ 展示方法に妥協せず、作品の性質、個性を生かした展示がとても良かったパフォーマンスの時間もスケジュールが立てやすく良かった。(女性、40歳代)
- ・ 作品の質が第1回第2回と年を重ねるごとにパワーダウンしているのが残念結局会場や演出に工夫しても作品がどうかつたことになる気がしつます(男性、50歳代)
- ・ 映像作品同士の音がまざつてしまうのが、残念(女性、20歳代)
- ・ 見て、聴いて、体感できるアートなので、いろいろな楽しみ方ができた。見る人によっては、不感や嫌悪感をもつものもあると思うが、他では見ることができないアートを今後も展示して欲しい。(男性、30歳代)
- ・ せめて、作家の国籍や簡単な経歴、作品のコンセプトなどの解説が欲しい。今回は分かりにくい作品が多かつたので、殆んど理解されないのでは？それは残念なこと。(女性、30歳代)



- ・ 作品のチョイスがかたよっているような気がしました。(女性、40 歳代)
- ・ アートだけでなく、デザインに関する分野の展示もほしい。(男性、20 歳代)
- ・ もっと日本人作家(若手+中堅)を出品させるべき(男性、20 歳代)

【会場について】

- ・ 会場が多いので2カ所~3カ所程度が希望(あまり離れていない所で)暖房のない会場もあるので、もう少し早い時期だといいな。(女性、30 歳代)
- ・ 施設どうしが遠い。バスの時間がわかりにくい。(女性、20 歳代)
- ・ 毎回会場が変わるのは、何とかならないか。(男性、40 歳代)
- ・ 横浜の町全体を使った展示方法はとても良いと思う。横浜の空気を感じながら作品を見れるので。(男性、19 歳以下)
- ・ 三溪園の利用が特によかった。屋外のシャボン玉も素敵。子供連れでは目がテン!になったので、二回目は大人だけできました。子供にもよくわかって、楽しい会場と大人むけ会場を分けるとよい。(男性、40 歳代)
- ・ 展示会場自体も力を入れてほしい。建築家の西沢氏を起用した意味がよくわからなかった(会場1)(男性、20 歳代)
- ・ 赤レンガ倉庫が他のイベントと重なると大変混み合っていて、トイレの少なさが不便だった。日程をずらして欲しいと思いました。(女性、20 歳代)
- ・ 三会場あるが、それほどはなれていないので問題無いです。(男性、30 歳代)
- ・ 新港パークのむきだしのパネル(壁をつくっているもの)は出来ればなんとかしてほしい。せっかくのトリエンナーレなのだから、細かい部分も気を使ってほしい。少しがっかりする。(女性、20 歳代)
- ・ 横浜の名所めぐりのような楽しさがある。赤レンガがとの連絡フェリーがあることをもっとわかりやすく明示してほしい。(女性、30 歳代)
- ・ 様々な作品のへやが迷路のようで発見するのが楽しかったところがよかった。(女性、19 歳以下)
- ・ 空気が悪いのが気になりました。(女性、30 歳代)
- ・ 海と里山の両方楽しめた(女性、60 歳代)
- ・ 陰気なカンジがよかった。(男性、20 歳代)
- ・ 都内でもやってほしいです(男性、20 歳代)
- ・ 関西ではやってもらえませんか。横浜ではなくなりますが毎日来ます。(女性、20 歳代)
- ・ 横浜以外ではやらないで下さい。(男性、20 歳代)
- ・ 横浜の港や、倉庫等既存の施設を、有効に活用した企画は結果的によかったと思います。(男性、50 歳代)

【会場運営について】

- ・ 会場までの案内が不親切だと思う。来るまでに迷ってしまった(男性、30 歳代)
- ・ 会場間の交通を平日も整備してほしい(男性、30 歳代)
- ・ おみやげを入れる袋が、シャリシャリとうるさいので、静かなインスタレーションの作品中などに、周りの人に申しわけなかった。(女性、20 歳代)
- ・ 飲み物を販売するところ、休める所がもう少しあった方がよい。以前よりベンチがふえたのはよい。(女性、50 歳代)
- ・ スタッフの誘導が親切なのは良いが、作品をみてる最中、直後に、「ありがとうございました」「お気をつけ下さい」は、善意である分、たいへん困る。(特に、赤レンガの廊下の作品の直後に、余韻を破られ、ほんとに残念)(女性、40 歳代)
- ・ コインロッカーをもう少し大きいのにしてほしい(男性、40 歳代)
- ・ もう少し夜おそくまでやってほしい。またはやる日をつくってほしい。そういう1週間があるとか…(女性、20 歳代)
- ・ 駐輪場がないこと。道案内が少ないこと(男性、30 歳代)
- ・ スタッフの方がもう少し、あいさつしたりすれば良いと思いました。(スタッフどうしはおしゃべりしてますが)また作品をみている前を通りすぎたりしないでほしい(女性、40 歳代)
- ・ 三溪園への無料送迎バスが欲しかった。(女性、40 歳代)
- ・ スタッフの対応が良く、更に感心をもって、美術、芸術に興味を持って見る事ができた。(男性、40 歳代)
- ・ 毎回業段入れないような場所を会場にしてくれるのが楽しい。赤レンガピアから日本郵船海岸通倉庫までのシャトルバスもライフジャケットを付けて乗るといった体験が良かった。(男性、40 歳代)
- ・ 写真撮影がOKなのが良かったです!(女性、20 歳代)
- ・ 小さな子供の声かけっこう聞こえて世界感にひたれない事があったので、入場制限(子供の)があると良いなと思った。(女性、20 歳代)
- ・ スタッフがきちんと理解できていないケースがあった。(女性、30 歳代)
- ・ 赤レンガ倉庫からBankart(?)への水上バスにのろうとしたときに、水上バスのり場のチケット売り場の店員の対応が悪く、うまいこと案内してもらえなかったばかりに、定員オーバーとなり水上バスにのれなかった。非

- 常に憤りを感じた。もっと案内を徹底してほしい。それと施設内の空調があまりよくなかった。(女性、20 歳代)
- ・ BANKARTとの連けいがわるい(女性、30 歳代)
- ・ 横浜をまわるものとして良い企画だと思う。地元の飲食店などもう少し提携してもいいかと思います。(女性、40 歳代)

【チケット・ショップ】

- ・ 入場券が2日間有効だったので、1泊2日で観に来た自分にとってちょうどよかった。2日くらいないと全てまわれないから、とても助かった。(女性、20 歳代)
- ・ カタログを買わないと、展示作品の意図があまり読みとれない。入場料金はもう少し安い方がよい。(1000 円くらい)(女性、20 歳代)
- ・ 1日だけのチケットを販売してほしい。(女性、20 歳代)
- ・ グッズがたかい。(女性、20 歳代)
- ・ 飲食にもっと力を入れてほしい！(女性、40 歳代)
- ・ ¥1800 でフリーパス(何回でも)の方がよい。いろいろな人来てほしいなら作品はへるものではないし、3回目にいくために¥3600 はハードル高い。(女性、20 歳代)
- ・ 入場は2日間ではなく、各会場1回ずつ見られる方がよい。期間中、何度も足を運ぶ方がじっくり作品を見られる。チケットも、ホルダーやクリップなど各会場回る間なくさない形、デザインになっているとより良い。Mapにはめ込めるようになっていたりとか…(女性、30 歳代)
- ・ 会場が分散しているにも拘わらず、ポスターは会期しかのってなくてMAPがない。これでは行きたくても行けない。(女性、40 歳代)
- ・ もっとグッズをふやしてほしい。(女性、20 歳代)
- ・ カタログを全国で買えるようにしてほしい。(限られた場所での販売だったので)(女性、20 歳代)
- ・ 入場料を横浜市民くらい安くすべき！高校生までは無料にすべき！(女性、40 歳代)
- ・ 美術生はもう少し安くならないのでしょうか？(女性、20 歳代)

【その他】

- ・ ガイドブックに作品名ぐらい欲しい。作品がわけわからなすぎる。もう少し現代芸術に慣れていない人も楽しめる作品が欲しかった。(女性、40 歳代)
- ・ 音声ガイドがないと、この様な作品は、わかり難いと思います。チケットと込みで貸出し出来れば良いと思います。(女性、40 歳代)
- ・ 無料ガイドを利用してとても楽しく見ることができたとし、勉強になった(女性、40 歳代)
- ・ 公式ホームページがみにくい。イベントが“いつ”“どこで”が分かりづらかった。(女性、30 歳代)
- ・ TVCMLしてほしい
- ・ 事前に(会場に来るまで)もう少し内容の情報が欲しい(女性、40 歳代)
- ・ もっとスポンサーをつのり大々的なPR活動をしてほしいのでは？と思いました(女性、30 歳代)
- ・ HPで他のイベントも一緒に紹介してほしい。(女性、40 歳代)
- ・ 東京都に居るとフライヤーを目にする事が少ない(女性、50 歳代)

横浜トリエンナーレ事務局

事務局長:

伊東正伸 国際交流基金トリエンナーレ準備室長

事務局次長:

今村裕一郎 横浜市開港 150 周年・創造都市事業本部創造都市推進課担当課長

内海 久 NHK 視聴者サービス局事業センター(美術・展博)担当部長

帯金章郎 朝日新聞社文化事業部企画委員

スタッフ:

清水優子／松岡裕佑／櫻井直子／藤橋美弥子(国際交流基金)

松村岳利／野田日文／斉藤淳一／山本雅子／彦坂早代(横浜市)

田中良憲／品川和彦(NHK)

堀越礼子／田中里美(朝日新聞社)

中村雅之／松井美鈴／鈴木慶子／桑崎 唯／松永真太郎(財団法人芸術文化振興財団)

岡しげみ／窪田研二／林 妙子／やのまき／山下陽子

山田彩子／マイケル・エディ／岡元美果／パトリア・リード

今野真理子／島津 京

平 昌子／大西晶子／淵上さち子／杉野 淳

一色與志子／大館奈津子／濱地絵里

岡部道子／王 節子／浅野千恵子／鳥居 茜／篠田怜実

石崎景子／佐々木樹理／山田淳広／米田広美／若林恵

横浜トリエンナーレ 2008 報告書

編集：横浜トリエンナーレ事務局

制作：株式会社ユーゴ

発行：横浜トリエンナーレ組織委員会

©2009